

「これからの環境教育、その可能性」

社団法人 日本環境教育フォーラム主催、日本電気株式会社（NEC）共催による「NEC森の人づくり講座」が1995年の開催以来10年を迎えました。この「NEC森の人づくり講座」は、NECの支援により全国の大学生を対象として行われているものです。環境教育に関心のある大学生が毎年40名選抜され、1週間程度の人材養成講座として自然体験を中心に構成されております。現在までに約420名の講座修了生を送り出し、その多くが環境教育に関連した分野で活躍されています。

そして、この講座が10年間継続したことを記念し、講座に参加したことを契機に環境教育にたずさわることになった講座修了生6人をむかえて、東京NEC本社において記念シンポジウムが開催されました。当日はJEEFの理事である稲本正、川嶋直両氏による基調講演に続き、講座修了生による事例報告を行い、最後に会場からの質問も取り入れながらパネルディスカッションを行いました。当日の進行内容は以下の通りです。

NEC森の人づくり講座 10周年記念シンポジウム

日時 : 2005年1月20日 14時から17時30分
場所 : NEC本社ビル地階 多目的ホール
参加者数 : 一般参加者 96名
講座修了生 38名 計134名

進行内容

開演挨拶 NEC CSR推進本部本部長 中西清司氏

NECとして社会貢献に意義のある活動であり、ますますの発展を願っている。

基調講演 「森林と持続可能性社会について」

JEEF常務理事 稲本正氏

南極の氷柱などからのCO₂濃度データから、産業革命以前の約40万年間と産業革命以降のCO₂濃度を比較した時、その急激な上昇から人類が地球環境を想像以上に破壊していることが明らかになる。

この危機的状況に対し具体的かつ成果を上げる方法として化石資源文明への依存を少しでも少なくしCO₂を削減する一方、植林したり森林の整備を行ったりすることが、CO₂を固定化するために必要である。多くの人は気持ちはあるが、実際の行動として具体化はされない。行動を起こすためのモチベーションが高まらないからだ。では、どうすれば良いのか。具体的なデータや解決方法を提示してモデルとなる行動や地域を示し、実績をあげて成果をみせることが大切である。そうすると共感することができ、モチベーションが高まり具体的な行動となって体現される。

「NEC森の人づくり講座」はモデル活動の一つとして、成果を実際に示すことのできる活動として10年の長きにわたり行ってきた。

基調講演 「環境教育人材育成事業～その限界と可能性」

JEEF専務理事 川嶋直氏

環境教育による人材育成とは、体験と参加（発見）から、学び手の能力、個性、意欲、元気を引き出し、指導者自身も学び、参加者同士がつながる場であり、自分の成長のための道筋を知ることが出来る「入学式」としての養成講座である。企業や地域・学校の中で、なぜ自分が行動しなくてはならないのか？ということが分かり意識できる、その意識へのスイッチが入ることを目指している。

NEC森の人づくり講座 10年の歩み 森林たくみ塾理事長 佃
10年間行われた講座についての写真と簡単な解説によるスライドショー。

事例報告 「私はいかにして今の仕事に就いたのか」

講座修了生 6名による事例及び体験報告の発表。

第一回修了生 小田貴志氏（京エコロジーセンター）

大学院で自然科学系の研究に携わっていたが、環境のことを一緒に考えていく場を創りたいとの思いから、研究職ではなく、環境教育の仕事を目指した。環境教育といっても、非常に幅広い分野なので、自分なりの切り口を持つことが大切だと考えている。

第一回修了生 西直人氏（ワークショップ・ミュー）

チャンスと出会い（人脈）を得て、環境教育や市民社会をテーマにした企画、プロデュースの仕事をしている。愛・地球博での自然学校の仕事も行う。

第二回修了生 大武圭介氏（ホールアース自然学校）

地球サミットから環境問題を学び、農への気付きやものづくり環境教育の可能性、地域振興につながる学びの場や自然学校の可能性を模索した。雑用大事主義（暮らしていくこと=雑用の集まり）のもと、現場からの発信を大切にしている。

第三回修了生 三輪拓也氏（石川県職員）

環境に関わることを「やりたい」と思う気持ちをこの講座でもらった。その思いを持ち続けることと活動しやすい環境（石川自然学校という県の取組み）があったことで、ボランティアという立場ではあるが環境教育に関わる活動を行うことができています。

第五回修了生 戸倉明子氏（財団法人 キープ協会 キープ自然学校）

森と人に関わる仕事を模索する中、講座に参加し、そこで得た仲間との思いなどの共有が、現在につながるものとなった。今は自分が実施するプログラムの参加者に、そのとき感じた熱い思いを伝えている。

第七回修了生 樋口拓氏（独立行政法人国立青年の家 国立中央青年の家）

講座を通して得た「人がつながる」ことを実践し、学生ネットワークや地元の人々を巻き込んでの活動で、様々な成功体験を得た。その体験をより多くの若者に伝えるため、学生と共に活動しながら「青年の家で行う環境教育とは」について考えている。

パネルディスカッション

参加者からの質問に答える形でのディスカッション。

Q. NEC森の人づくり講座を10年間支援し続けることは大変ではないか。

A. 大変ではあるが、毎年少しずつ新しい要素を加え、続けることができた。

Q. 企業が行う環境対応・環境教育はどのように行えばよいか。

A. 得意分野で、出来るモノ・できることから始めるのがよいだろう。

企業に勤める社会人が環境に関わる場合にも同じことが言える。

Q. 環境に興味のない人をどう巻き込んでいけばよいか。

A. 学校行事として体験プログラムを制度化して子供達にきっかけを与えることが大切なのだろう。ただし、やり方を間違えると自然嫌いになってしまう。

また、気軽に体験できる場所があることを知ってもらうことも意味がある。

Q. 講座を通して自分の思い込みに気付いた経験があれば教えてください。

A. 森を守る=木を切ってはいけない。これは思い込み。生態系を維持するために木を切ることもある。

Q. 愛知万博が自然の叡智をテーマに行われますがどういう変化を期待しますか。

A. 施設がのこり、プログラムが残り、スタッフが残る。

一方、環境教育に関心のある人と、そうでない人の格差が広がるおそれがある。

Q. これからの10年はどうなっていくか。

A. ESD（持続可能な開発のための教育）の10年の取組みが何らかの成果を求められるとき。今環境には良い波が来ている。地球の為に、人類の為に、国を挙げてその波に乗る必要があるだろう。来た波を逃さないことだ。

参加者アンケートより

- ・皆様のお話を聞きながら、再びやる気を持つことができました。色々な活動を通して環境教育はできると思いますので、環境に関わっていきたいです。興味がない人にも興味がある人にも今後メッセージを伝えられたら…。身近な人から、簡単なことから始めていきたいです。(20代女性)
- ・今回初めてこの事業を知り、学生の方がうらやましくなりました。学生の方には数多くこういった事業に参加して欲しいです。(20代女性)
- ・NEC にはこれからもこの活動を続けていただきたいです。こういうことを続けるのは大変でしょうが、頑張ってください。(30代男性)
- ・このシンポジウムが根っこになって、たくさんの企業さんの参加を期待します。そして、内部にも環境教育、体験事業を進めていってほしいと思います。(20代女性)